

SPECIAL REPORT

平井 通宏
Michihiro Hirai

有限会社 平井ランゲージ・サービス 社長、神奈川大学理学部特任教授 (科学技術英語担当)、
早稲田大学理工学術院非常勤講師

受信型スキルテストで仕事における発信型能力を測れるか

最近、日本の経済・社会の国際化を反映して、英語能力の向上が声高に叫ばれています。それに伴い、特定の英語試験の成績を採用や昇進の条件にする風潮が広がっていますが、そのことが果たして本当に必要とされる英語能力の強化につながっているのでしょうか。筆者は、企業内英語研修所の運営に4年間、さらに大学の英語教育に約10年間携わってきた経験からこの問題を追及してきましたが、否定的な答えしか導き出せません。この度、公益財団法人日本英語検定協会のデータを統計的に分析した結果を、全国語学教育学会 (Japan Association for Language Teaching: JALT) で発表しましたので、ここにその要点をご紹介します、警鐘を鳴らしたいと思います。なお、この記事は筆者の個人的な意見であり、公益財団法人 日本英語検定協会のものではありません。

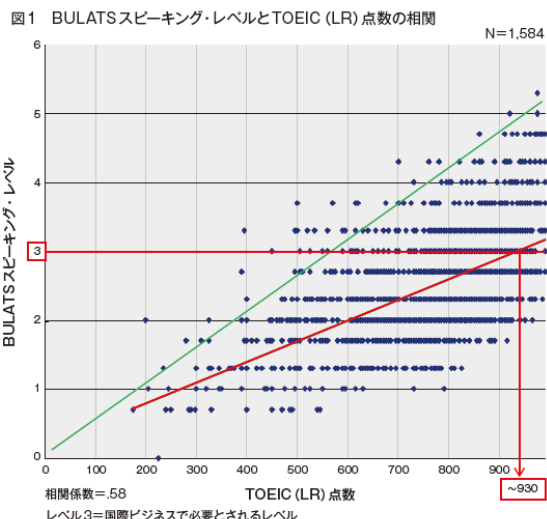
ビジネス英語スピーキング能力と TOEIC® (LR) 点数の相関

図1は、2005年4月1日から2012年2月8日までに、ビジネス英語能力評価試験 BULATS (英国ケンブリッジ大学 ESOL が開発) のスピーキング・テストを受験し、かつ、その前2年以内に TOEIC リスニング/リーディング (LR) テストを受けたことのある 1,584名について、BULATS スピーキング・レベルと TOEIC (LR) 点数の分布を示したものです。BULATS スピーキング・テストの成績は、0、0+、1-、1=、...、5-、5+の17レベルのどれかとして報告されますが、統計処理上、これらは0、0.3、0.7、1.0、...、5.0、5.3に数値化されています。また、TOEIC (LR) テストは最低0点から最高990点まで分布しています。

相関の強さを示す相関係数は.58で、TOEICの開発元である米国 Educational Testing Service (ETS®) が2010年に公表した、TOEICスピーキング・テスト点数とTOEIC (LR) 点数との相関係数.64 (補正後.75) よりも低いです。これは、BULATS が文字通りビジネス・シチュエーションに即した実践的英語を集中的に出題していることを反映しています (対照的に、TOEIC は最近「ビジネス」英語の要素を多少採り入れてはいますが、その程度が浅いと言えます)。

もう一つ、今回の調査で判明した衝撃的な事実とは、TOEIC (LR) 高得点の日本人ビジネスパーソンの大部分に、国際ビジネスの現場で要求されるスピーキング能力が不足していることです。図1には、各TOEIC (LR) 点数に対応するBULATS スピーキング・レベルのいわば平均を表す「帰帰線」を赤の斜線で示してありますが、これがかなり平たく「寝て」います。TOEIC (LR) 点数がスピーキング・スキルを正確に表す (つまり、TOEIC (LR) 満点ならスピーキン

グもパーフェクト) と仮定した場合の両者の「理想的関係」を緑の斜線で示してありますが、実際のスキル・レベルを表す帰帰線がこれよりかなり下になっており、点数が高いほどその乖離が顕著になっていることが分かります。さらに、国際ビジネスパーソンに必要とされるスキルは、BULATS スピーキング・レベル3に相当しますが、帰帰線がこれと交差するのが、TOEIC (LR) の約930点、つまり、TOEIC (LR) 930点保有者でも約半数が、国際ビジネスパーソンに必要とされるスピーキング・レベルに到達していないことが示されています。実際、TOEIC (LR) 800点以上保有者の56% がこのレベルに届いていません。



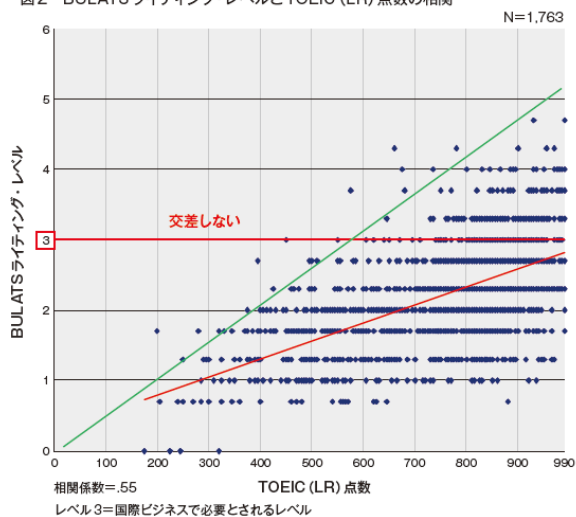
ビジネス英語ライティング能力とTOEIC® (LR) 点数の相関

図2は、2005年4月1日から2012年2月8日までに、BULATSライティング・テストを受験し、かつ、その前2年以内にTOEIC (LR) テストを受けたことのある1,763名について、BULATSライティング・レベルとTOEIC (LR) 点数の分布を示したものです。

相関係数は.55で、ETS®が2010年に公表した、TOEICライティング・テスト点数とTOEIC (LR) 点数との相関係数.62 (補正後.70) よりも低いです。これも、スピーキングと同様、BULATSライティング・テストがよりビジネスの実務に即していることを反映しています。

スピーキングの場合に比べると、受験者の平均的レベル (赤の斜線=回帰線) がさらに平たく「寝て」いるだけではなく、国際ビジネスパーソンに必要とされるBULATSライティング・レベル3と交差しません、つまり、TOEIC (LR) 満点 (990点) でも、平均してこのレベルに到達できていないことが分かります。実際、TOEIC (LR) 800点以上保有者の71%がこのレベルに届いていません。

図2 BULATSライティング・レベルとTOEIC (LR) 点数の相関



まとめ

以上の観察から、結論として次の2点が言えるでしょう。

- (1) TOEIC (LR) 点数でビジネス英語の、特にその発信型スキルを類推することは意味がない。
- (2) TOEIC (LR) 高得点 (800点以上) の日本人ビジネスパーソンの大部分が、国際ビジネスに必要とされるスピーキング、ライティングの要求水準を満たしていない。

(1) の理由としては、元来、受信型 (リスニング、リーディング) スキルと発信型 (スピーキング、ライティング) スキルの相関が緩く、個人差も大きいこと、また、ビジネスの現場では一般英語でカバーされない語彙や実務的背景・知識が求められることが挙げられます。

(2) の原因としては、日本の英語教育が一般英語中心であり、ビジネスの現場で必要とされる英語 (特に発信

型スキル) についての訓練や経験が大きく不足していることが考えられます。

日本人がよく英語を勉強する割に実力が上がらない主要な原因は、TOEIC (LR) に代表される受信型試験に血道を上げてエネルギーを消耗し、その分、発信型スキル (特に実務におけるスキル) の訓練がおろそかになっていることにある、と筆者は危惧しています。例えば、「部課長になるにはTOEIC 800点以上必要」というような条件をつけると、TOEIC 点数を上げる勉強しかなくなり、その分、発信型スキル向上の努力を放棄してしまうので、いつまでたっても、話せない・書けないという状態から抜け出せなくなるのです。その意味で、TOEIC 点数を上げるのと、実務で使える英語スキルを身につけるのは、相反することです。どちらが大切なのでしょうか。そろそろ英語能力の評価や勉強のアプローチの仕方を見直す時期に来ていると思います。